

# 特集 十年のキセキ。

子育て総合支援センター開設10周年



千歳市子育て総合支援センター・愛称「ちとせっこセンター」が今年で10周年を迎えました。平成20年4月に、山口市政発足後の《ハコモノ》第1号として誕生した《親と子のための複合施設》は、対象者が限られていながらもピーク時には年間延べ利用者が3万6千人（1日当たり1200人）を超える、ほかのまちでは例を見ない公共施設として市民の皆さんに親しまれてきました。今月の特集では、センターの軌跡をたどりながら、時代の流れに裏付けられた施設開設の必然性と、裏舞台にフォーカスを当ててみます。

## 《保育》から《子育て支援》への時代の流れ

30年ほど前から、《子育て支援》は、地域の身近な児童福祉施設《保育所》がその役割を担ってきました。90年代に入り、少子化に対する危機感から子育て支援に関する具体的事業の実践が国の政策により加速化。保育所地域子育てモデル事業（平成5年創設）／7年には《地域子育て支援センター事業》（へと名称変更）などの子育て支援に対する補助事業が活発化しました。

市は、平成10年3月に、国・北海道のエンゼルプランに合わせて、最初の《千歳市子育て支援計画》とちとせつ子すこやかプラン》を策定。この計画の主要な取組として、当時、施設整備の検討が進められていた私立保育所に併設・事業受託を募り、国の補助事業での《子育て支援センター》が、11年に市内で初めて開設しました。現在のアリス認定こども園（当時・アリス保育園）に併設された《アリス子育て支援センター》です。

その後も、国の政策は変革を重ねました。親子が集う場を提供する《つどいの広場》（前身）《が創設（平成14年）され、19年には、地域子育て支援センター事業と合わせた《地域子育て支援拠点事業》へと再編。その後、法的にも《保育所での子育て支援》とは独立した《第2種社会福祉事業》へと移行しました。

## 《民活》と同時に進められた公設公営の複合施設

平成15年に施行した《次世代育成支援対策推進法》により、子育て支援事業の充実化と平行して、保育所運営の民間活用が促進されるようになりました。市もまた、平成17年3月に策定した新たな子育て支援計画において、当時4か所の公立保育所のうち2か所を民営化し、老朽化した末広保育所（現在・認定こども園つばさ）は公立のまま隣地に新設する《子育て総合支援センター》内へ移転することを決定しました。

平成20年4月の旧・千歳保育所の民営化とセンター開設を同時に担当した当時の保育課長は次のように語ります。

「当時は千歳の保育行政の転換期でした。民活促進のバックボーンには、質の担保が不可欠ですし、全体的に、子育て支援と保育のスタンダードを確立するためには、横の連携を高めなくてはなりません。最も大変だったのは、施設整備より人的資源の活用と連携だったと思います。」

## アノ人に聴く！

### 20年前から開設している民間の子育て支援センター アリス子育て支援センター

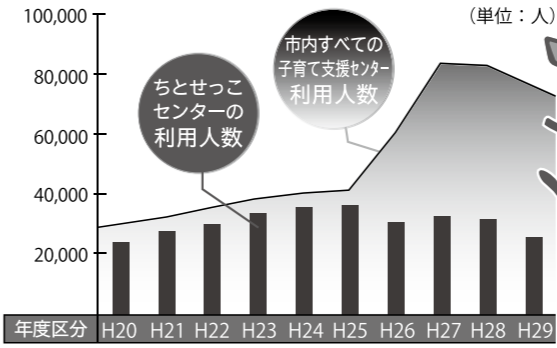
所在・勇舞1丁目1-1

**核** 家族や子育てが孤立している家族のために、保育所のノウハウを子育て家庭の支援に生かそうという時代の流れがありました。しかし、当時はまだ「子育て支援センターってなんですか？」という質問が多く、職員（保育士）の意識づくりも非常に大切でした。そのころの国の事業実施要綱には、センター職員は《指導者》という立場で書かれておりまして、担当者の「子どもを保育する立場」から「親子に指導する立場」への気持ちの入れ替えは、難しいことだったと思います。センターの業務はおもに《相談》でしたので、家庭生活カウンセラーの講座を受講したり、ロールプレイを積極的に取り入れたりなど、それまでの保育所が入所児童の親に関わってきたことよりも、もっと深いところで対応する技術が求められていました。現在では、《指導》が《支援》へと変わり、ちとせっこ・げんきっこ、児童館での実施を含めると、センター事業が数多く展開されるようになりましたが、とても素晴らしいことだと思っています。千歳のお母さんたちが、昔よりも生き生きしていると実感します。



アリス子育て支援センター長 社会福祉法人 千歳洋翔会 常務理事  
こだま みつこ  
**児玉 美津子**さん

## 子育て支援センターの年間延べ利用人数の推移



【正式名】千歳市子育て総合支援センター  
 【愛称】ちとせっこセンター（公募選考）  
 【所在地】千歳市花園4丁目3番1号  
 【床面積】2,201.60㎡（延べ）  
 【用途】①認定こども園（旧・保育所）、②子育て支援センター、③つどいの広場、④学童クラブ、⑤児童館  
 【開設日】平成20(2008)年4月1日  
 【建設費】5億9,945万2,434円

**セ**ンターは、5つの施設を複合的に持ちながら、それぞれが連携を図り、各種親子支援、情報発信、子育てボランティアの育成などを行う《子育て支援の拠点》となることを目的に建設されました。開設当時、保育所と子育て支援センターの併設などは他市町村でもありましたが、それぞれが独立して機能しており、0歳から18歳までの児童の施設がすべて入居し、かつ「子育て支援」という同じ目的に向かって有機的に作用し合う機能を求められた施設の前例は、ほとんどありませんでした。

## ■子育てガイドに“ゼロ版”があった？

今年3月発行の《ちとせ子育てガイド》は、平成18年2月の第1版発行から通算5版目の市の子育て支援ガイドブックですが、その前年（17年7月）に、アリス子育て支援センターと子育てママたちが《協働》で、手作りの《ちとせ子育てガイド～Happyママ》を作成していました。



## ■ちとせっこセンターは半円形？

センターは、入り口側から見ると横長の長方形に見えますが、上空から見ると半円形なのをご存じですか？やさしい円形のデザインが取り入れられたこの建物は、北海道主催の《平成20年度北海道福祉のまちづくりコンクール》で北海道福祉のまちづくり賞を受賞しています。



子育て総合支援センター

10年の軌跡

- 2008 H20
  - 子育て総合支援センター開所式
  - あそびの広場（親子教室）第1回開催
  - 「あつまれ！ にこにこ&わくわくランド」
  - ちとせ子育て支援ネットワーク会議発足
  - ちとせこボランティア募集
  - 未広保育所と子育て支援センター利用者との合同焼きいも会開催
  - 地域の老人クラブとの世代間交流実施
  - 学童クラブと未広保育所の交流事業実施

- 2009 H21
  - ちとせこ子育て塾開講
  - 消防署の救急救命講座開催
  - 地震を想定した全館合同避難訓練実施
  - あかちゃんランド第1回開催
  - 歯科衛生士の講演会開催

- 2010 H22
  - ちとせこボランティア交流会開催
  - 学童クラブ・児童館合同百人一首大会開催
  - ちとせ子育て支援ネットワーク会議運営委員会発足

- 2011 H23
  - 0～3歳未満児対象のミニ運動会開催
  - パパのベビーマッサージ開催
  - 屋外出前イベントの実施

- 2012 H24
  - 子育てサークル交流会開催
  - 5周年記念 日曜開館初実施
  - ちとせこセンターブログ開設

- 2013 H25
  - 市民団体 link ～つなぐの皆さんがほっかいどう子育て応援大賞受賞

- 2014 H26
  - 学童クラブ対象児童年齢拡大
  - 児童館でのランドセル来館開始
  - 中高生タイム・ランチデー・ランチタイム導入
  - 9館合同児童館まつり開催

- 2015 H27
  - 子育てコンシェルジュ配置（2人）
  - 7単館児童館での子育て支援事業開始
  - 日曜開館 本格実施
  - 未広保育所が認定こども園つばさに移行
  - つどいの広場で母親が講師のママ講座開催
  - つどいの広場託児ボランティア募集
  - 転入親子ウエルカム交流ツアー開催
  - 児童館緊急メッセージ発信
  - いいお産の日 in ちとせ開催
  - 企業連携がせみ開催

- 2016 H28
  - 毎日ランチデーの実施

- 2017 H29
  - FJ安藤パパのトーク&絵本ライブ開催

- 2018 H30
  - センター開設10周年記念式開催



開設時は小学6年生でしたが、実際に通い詰めるようになったのは高校1年からでした。平成26年からスタートした児童館での《中高生タイム》を使って、スポーツ大会や肝試し、花火など、高校生ならではの行事を仲間と企画しました。当時、児童館の職員の方が、毎日熱心に相談に乗ってくれて、遊ぶだけじゃない、社会との関わりを持てたことが、ぼくらの自信につながりました。今は2人とも市内で働いていますが、センターがぼくらの《青春のステージ》ですね。これからも社会人として関わりたいと思っています。

ちとせこ中高生委員会の2人

センターが《青春のステージ》でした。

十年のキセキ。

子育て総合支援センター開設10周年

子育てをたった1人で頑張るのは本当に大変なことです。センターは、開設当初から、千歳の子育て支援の核施設を目指し、まちの特性と子育て家庭のニーズを踏まえながら、各部門において、さまざまな事業を企画し、実施してきました。しかし本質的なものとして、子育て中の母親や中高生を含む子どもたちが、辛いときも、楽しいときも、気軽に訪れ、ほっとできる場所であり、笑顔になって家路へと向かえることが、

センター職員一人一人の変わらぬ願いであり、公立、民間の別を問わず、市内の子育て支援事業を担当するすべての方の《共通認識》でもあります。センターが歩む10年の軌跡は、市の計画の実現と新たな《千歳の子育て支援》のスタンダードを目指す、すべての子育て支援担当者との熱意と努力のみのりでもありました。この10年の間、子育て家

庭に見られる変化の一つとして、センターに来館する父親が増えてきました。また、子どもと祖父母世代の関わり《孫育て》にも関心が寄せられています。多彩な世代の集まりを呼びかけ、子育て支援につなげていくことは、今後のセンターが目指す一つの方向性かも知れません。子育て総合支援センター10年の軌跡が、今後どのようなキセキ（奇跡）を生み出すか、市民の皆さんと一緒に考え、進めていきたいと思っています。

《センター長》として、市の人事異動の内示を受けたのが平成20年3月中旬。心の準備が整わないまま、4月1日のセンター開所式を迎えましたが、当日の午前1時ごろに「カーテンをどうするか」など、ぎりぎりまで準備に追われていた記憶があります。総合施設の長という役割は、館内で起こるすべてのことに関わり、束ねていくことが求められました。その中で、各事業の担当者からは熱心な意見や要望が出てきます。事業間で衝突することもありました。その都度、合同会議を何度も設け、互いの事業をわかり合うことに時間を割きました。職員の《和》が大

切で、和がなければ、現場でいろいろな問題が起きやすくなります。できるだけみんなが集まり一致点を見つける努力をしました。また、市の計画では、市内の各施設・子育て支援の《核》となることが求められていました。センターの役割として《ちとせ子育て支援ネットワーク会議の運営》というものがあるので、つまり、市内の教育・保育・保健関係者、主任児童委員など、公人・私人の別を問わず一緒に市の子育て支援を考える会議です。この会議の立ち上げは本当に難しかったですね。会議を重ねるにつれ、互いの組織や事業を理解し合うことで、少しずつ連携の

《輪》が生まれてきました。センターの中も外も、みんなの立場や役割は違っても、《子育て支援》という目的は一緒。大事なものは《人》でした。私にとって、今日までのセンターの10年が輝かしく、そして千歳の子育て支援が活気づいて見えるのは、同じ目的を目指す皆さんの《思い》や《質》が非常に高いからだと思っています。

（センターが軌道に乗るまでのみちのり）  
みんなの立場や役割は違っても、目的は一緒、大事なものは《人》でした。

元・市の保育士/信濃在住/現在は、センターでの経験を生かし人権擁護委員として活動するほか、趣味の手作りパンを楽しんでいます。

初代・子育て総合支援センター長  
（平成20年4月～23年3月）  
庄司 智子さん  
しょうじ ともこ



《つどいの広場》を運営する市民団体 link～つなぐ代表 おおせき けいこ 大関 恵子さん

《親支援》ではなく《人をつなぐ支援》

《つどいの広場》は、親同士が子育てを通じて交流し、子育ての孤立を解消することが目的のスペースですが、ママたちが求めていることは、《親》として認められることよりも、《人》としての価値を理解されることだと思うようになりました。4年前に、自分のこと・趣味のことなど何でもPRできる《掲示板》を設けました。それを見て、「この人こんなことができるんだ」という気づきから、ママが講師を務める《ママ講座》をスタートしました。受講者の託児ボランティアには、子どもが幼稚園などに上がったママたちに声かけしています。「ママが先生になって嬉しい」と言う子どもの言葉に感動する親や、「私のことを覚えていて、声をかけてくれた」と歓び親など、ママたちみんなが《イキイキしながら、つながっていくこと》を、私たちスタッフみんなはとても嬉しく思っています。



link～つなぐのスタッフの皆さん

《つどいの広場》は図書館だった？

現在、市民団体が運営する《つどいの広場》は、平成17年に図書館2階で開設しました。当時は、アリス子育て支援センターまでは遠い向陽台地区の保護者の方などの便を考えたサテライト型子育て支援センターという位置づけで、市の《子育てアドバイザー》が担当していました。



H17.6.17 開設第1号

ちとせこセンターの《くす玉》は縁起物？

平成20年4月1日のセンター開所式で使われた職員手作りの《くす玉》は、「必ず開く縁起物」として、以降の各種施設の開所式で装飾を変えながら使われるようになりました。最近では、みどりっこよつば学童クラブ開所式、センター10周年記念式でも使われています。



センターにまつわる

よもやま話